

# 序

## I. ケンブリッジ大学図書館所蔵の梵文法華經貝葉写本 Add. 1684 (略号 C5)について

このローマ字テキストの原本は、ケンブリッジ大学図書館所蔵の梵文法華經貝葉写本 Add. 1684 (略号 C5)<sup>1</sup>である。セシル・ベンドール (Cecil Bendall, 1856–1906)によれば、この写本はネパール暦 185 年に書写されたものであり、それは西暦 1064 年か 1065 年に相当する<sup>2</sup>。しかし、筆者が確認したカラーのデジタル写真とそのプリントアウトコピー (156b4) では、185 の 5 に相当するネパール数文字の大部分が破損しているので、それを 5 であると断定することは筆者にはできない。ただ、このフォリオ裏面の 5 行目に「尊極なるシュリー・プラデュムナカーマデーヴァ王の治世に (paramabhaṭṭārakaśrīpadyumnaṅkāmaḍevasya rājye)」とあるので、185 という数字は正しいと推定できるだろう<sup>3</sup>。奥書のその他の記述については、ベンドールのカタログに詳しい<sup>4</sup>。ただし、以下のことを修正、補足する必要がある。

① 85 のナンバリングのフォリオが 2 葉ある。これらを本書では 85α と 85β として区別した。前者は、ケルン・南條本 (KN 263.7–265.9) の範囲のもので、その前後のフォリオ 84 と 86 につながる。後者は、85β-a1–4, 4–5 (KN 263.7–264.6, 279.1–279.9), 85β-b (KN 279.9–281.13) の範囲のものである。

② 奥書の読みが、筆者のものと完全に同じではない。ただし、要旨に大きな影響を与える程の違いはない。詳しくは、本書のローマ字テキストとベンドールのカタログ p. 173 の記述とを比較されたい。

③ カタログに、(?) 310 (cf. table of numbers, note). と記載されている未比定のフォリオが 1 葉ある。そのナンバリングを筆者は 310 ではなく、316 と読む。

④ この写本のフォリオの総計は、85β を加えれば 158 葉、除外すれば 157 葉と推定できる。

## II. 貝葉写本の書写年について

現在までに (2010年3月)、原本がレプリカや写真版その他のデータの形態で公開されている貝葉写本のうち、書写年が判明しているのは、年代の古いものから列挙すると以下のようにになる<sup>5</sup>。

	ネパール暦	西暦
C4	159	1039
C5	185 (?)	1064/1065 (?)
K	191	1069/1070
Pe	202	1082
C6	213	1093
N1	271	1151

上記の写本以外に、書写年は不明であるが、貝葉写本全体のグループ分けという視点から、特に重要と筆者が判断するのは、C3, B, T2, N3 である。C3 は、83b の 5 行目 (KN 254.2) の *prakṣi-* 以後が失われている。しかし、戸田宏文 (1936–2003) は、C3 は古い伝承を伝えている本文を有する写本であり、ギルギット写本やチベット語訳とひじょうに密接に関連する写本であると判断している<sup>6</sup>。これらの他に、2006 年にローマ字版が発刊された 3 本の貝葉写本がある。チベットのポタラ宮所蔵の 1 本は書写年が不明だが、他の 2 本の書写年はそれぞれ 1065 年と 1067 年である<sup>7</sup>。これらは 3 本とも資料的価値が高いと考えられる。それらの原本が速やかに、なんらかの形態で世界の研究者に公開されることを切望する。

### III. フォリオ 85βについて

このフォリオは、85β-a (KN 263.7–264.6, 279.1–279.9), 85β-b (KN 279.9–281.13) の範囲のもので、第11章のテキスト (KN 263.7–264.6) と第13章のテキスト (KN 279.1–281.13) の二つの部分に分かれ、それぞれ 85a-a1–4 と 90a4–91a1 の部分と重複する。以下に、それぞれの読みを比較したい。

#### (1) (KN 263.7–264.6)

##### 85a-a1–4

- 1 [mai]tracittā karuṇā(m ca) vācam bhāṣate || sā samyaksambodhim abhisamboddhum\* samantāt\* prajñākūṭo bodhisatvo mahāsatva āha | dṛṣṭo mayā bhagavān sākyamunis tathāgato bodhāya ghaṭamānah | bodhisatvo 'nekāni puṇyāni kṛtavān\* | anekāni ca ka=lpasahasrāni na kadācid vīryam sa(m)sritavān\*
- 2 trisāhasramahāsāhasrāyām lokadhātau nāsti kaścid antasah sarṣapamātro 'pi pṛthivīpra=deśo yatrānenā sarīram (na) nikṣiptam satvahitahetoḥ paścād bodhim abhisambuddhāḥ ka evam sraddadhāt\* | yadā 'nayā sakyam mu[r]hūrttena anuttarām samyaksambodhim abhisamboddhum\* || atha khalu tasyām
- 3 velāyām sāgaranāgarājāduhitā agrataḥ sthitā samāḍīṣyante sma | sā bhagavataḥ pādau śi=rasā 'bhivandya ekānte 'sthāt\* | tasyāñ ca velāyām imā gāthā abhāṣata : || puṇyam puṇyam gambhīrañ ca diśaḥ spharati sarvataḥ sūkṣmam sarīram dvātriṁsallakṣaṇaiḥ samalamkṛtam || (49) anuvya=

4 न्नजनयुक्तान् च सर्वसत्त्वानामस्कृतम् । सर्वसत्त्वाभिगम्यान् च अंतरापानवद् यथा ॥  
 (50) यथेच्छयां मे सम्बोधीः साक्षी मे 'त्रा तथागताह । विस्तिर्णन देशयिस्यामि  
 धर्मान् दुहक्षमं प्रमोक्षकम् ॥ (51)

85β-a1-4

1 tracittā karuṇā(ṁ) ca vācam bhāṣate ॥ sā samyaksam̄bodhim abhisam̄boddhum **samarthā**  
 prajñākūṭo **bodhisatvāha** ॥ yṛsto mayā śākyamunis tathāgato । bodhāya ghaṭa(māno)  
 bodhisatvabhūto 'nekāni puṇyāni kṛtvān̄ anekāni ca kalpasahasrāṇi na kadācid vīryam  
 saṃsritavān\* trisāhasramahāsā=

2 hasryām lokadhātā nāsti sa kaścid antasah sarṣapamātro 'pi **pradeśo** yatrānena śarīram  
 na nikṣiptam **sarvahetoh** paścād bodhim abhisam̄buddhah **ka** vayam sraddadhātyanta  
 taylor

śakyām muhūrtenānuttarā(ṁ) samyaksam̄bodhim abhisam̄boddhum ॥ atha tasyām velā=

yā(ṁ) sāgaranāgarājaduhitā agratah

3 sthitvā samdr̄syante sā bhagavatah pādau śirasā 'bhivandyāikānte 'sthāt(\* ta)syāñ ca  
 velāyām imā gāthā abhāṣata । puṇyām puṇyām **gambhīram** ve disah spharati sarvasaḥ  
 | sūkṣmam **gambhīram** dvātriṁsalakṣaṇaiḥ samalamkṛtam : | (49) anuvyañjanayuktañ ca  
 sarvatasatvanāmaskṛtam | sa[m]rvatasatvābhigamy=

4 न् च अंतरापानवद् यथा । (50) यथेच्छयां मे (सम)बोधीः साक्षी मे 'त्रा तथागताह  
 | विस्तिर्णन देशयिस्यामि धर्मान् दुहक्षप्रमोक्षनम् ॥ (51)

① 85α-a の samartāt\* は誤写である。

② 85α-a の mahāsatva は 85β-a にも他の写本にも見られない。

③ 85α-a の bhagavān が欠けているのは、85β-a と D2; K; T2, P1, P2 である。なお、85β-a  
 の yṛ は dṛ の誤写である。

④ 85α-a の pṛthivīpradeśo の pṛthivī が欠けているのは 85β-a と K, Pe である。

⑤ 85α-a の satvahitahetoh は B, T6, T7: A2, A3: R, T9; T4, T5: N3, T8, P3: C1, C2: T2, P1, P2 と  
 同じ読みである。C4, K, Pe, N1: T3: A1 は satvahetoh と読み、D2 もこのように読む<sup>8</sup>。ところ  
 が、85β-a は sarvahetoh と読んでいる。85β-a だけがこのように読んでいるので、sarva- は  
 satva- の誤写の可能性がある。念のため手元の C6 のカラーコピーを見ると、satvahitahetoh  
 と読める (C6 74b6)。従って、C6 は B 系に属すると考えられ、sarvahetoh は 85β-a 独自の読み  
 といふことになる。もっとも、これは satva<sup>°</sup> の誤写の可能性も考えられる。

⑥ 85β-a の sūkṣmam gambhīram は、puṇyām gambhīram の gambhīram を写したものである。  
 Pe と N1 がこれと同じ誤写をしている。

以上のことから、(KN 263.7–264.6) の範囲で、85α-a は B 系の読みに近く、85β-a は C4, K,  
 Pe, N1 に近い読みをもつことがわかる。写本のグループ分けは様々な要因が影響し合って、

糸余曲折があり、画一的に言えることではないが、大筋として、フォリオ 85α 辺りから C5 の読みは、それまでの C4, K, Pe, N1 のグループに近い読みから外れて B 系の読みに接近していく。C6 のフォリオ 74 は、satvahitahetoḥ paścād bodhim abhisam̄buddhah | で終わり、フォリオ 75 (KN 263.12–267.8) となる。この 1 葉は後代の書写である。85α-a, 85β-a との比較のために、上記の範囲 (KN 263.12–264.6) の C6 75a のローマ字テキストを以下に記述する。

## C6 75a (New Ms.)

1 (paścād bodhim abhisam̄buddhah) ka evam śraddadhyād yat tayā sakyam muhū(r)tte= nānuttarā(m) samyaksam̄bodhim abhisam̄bodhum⁹ || atha khalu tasyām velāyām sāgara= nāgarājāduhitā agrata(h) sthitā samdr̄syante sma || sā bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā ekānte 'sthāt\* || tasyā(m) ca velāyāmm imā gāthā abhāṣata : (omission) sūkṣmam̄ śari= ram dvātri(m)śallakṣaṇaiḥ sa=

2 malam̄kṛtam | (49) anuvañjanayuktaś ca sarvvasatvanamaskṛtam || sarvvasatvābhigamyāś ca amnuttarāprāṇavat yathā | (50) yathēcchayā me sam̄bodhiḥ sākṣī ma 'tra tathāga= taḥ | vistirṇṇam deśayisyāmi dharmmam̄ duḥkhapramoca[m]nam || (51)

⑦ C6 の ka evam śraddadhyād yat tayā は、C4, K, Pe, N1 の読みと一致する。しかし、ここは、B 系写本の読みにバラツキが見られ、T6, N2, A1 は C6 に合う読みであるが、B, T7 は ka enam̄ śradhāsyati と読んでいる。因みに、N3, T8 は、ka enam̄ śraddhadhyāt\* である。したがって、C6 の読みが B 系から外れたとは断定できない。85β-a の vayaṁ sraddadhātyanta taylor は、グループ分けの視点から、C4, K, Pe, N1 のいずれかの誤写と考えられる。85α-a の yadā 'nayā は紙写本の系統に類似する。

⑧ C6 の amnuttarāprāṇavat の異読は、antarāpāṇavat C4, K, C5 (85α-a, 85β-a), Pe, N1: B, T6, T7, N2, A1: T3: T8, N3 (*illegible*) のグループと anuttarāpāṇavat C1, C2; anu(tta)rāpāṇavat T2, P1, P2 anuttarāprāṇavat A2, A3, P3 の二つのグループに大別できる。後者のグループの読みの解釈には無理がある。ビュルヌフはこれを、“comme s'il était leur concitoyen”<sup>10</sup> と、前者の読みに準じて意訳している。

①-⑧のことから、C5 の 85α-a, 85β-a と C6 の 75a の (KN 263.12–264.6) の範囲について、次の推論が導かれる。

- ① 85α-a は B 系、85β-a は C4, K, N1, Pe に近い読みをもつフォリオである。
- ② C6 75a (New Ms.) は、B 系の読みを持ち、紙写本の書写上の特徴である (sarvva°, dharmma°) が見られる。
- ③ C5 と C6 の読みはこの辺りから類似するようになる。
- ④ A2 が anuttarāpāṇavat と、C6 75a と同じ読みをしているのは重要な点である。C6 75a (New Ms.) の箇所が、A2 とおなじ 18 世紀の初頭に書写されたのではないかと推測できる一つの根拠が与えられるからである。

## (2) (KN 279.1–281.13)

この重複する箇所は、13章の第3偈から21偈までの範囲に相当し、戸田のローマ字テキスト(略号RR)に収められている<sup>11</sup>。筆者は、C5(85β-ab), C5(90ab)の二種類のフォリオとRRとを比較検証した。最初にその結果を以下に述べておく。

① C5(85β-ab)とC5(90ab)は、異なるグループの読みを持ち、前者は、K, T2, C4, Pe, N1の読みに近く、後者は、B系の読みを維持する。これは、(1) (KN 263.7–264.6)の検証結果①と矛盾しない。

② RRのテキストのC5の部分にはC5(90ab)の読みが充てられている。

③ C5(85β-ab)には、(omission 279.2), (omission 279.11–280.3), またC5(90ab)には、(omission 279.11–280.1)の部分がある。RRでは、これらの部分にC6の読みが充てられている。(1)の③の推論が示すように、この処置は結果的に正しかったが、フォリオ85βの読みが十分に検討されなかったという点で、資料の処理方法が厳密であったとはいえない。

筆者は、この箇所からいくつかのサンプルを抽出して、C5(85β-ab)とC5(90ab)との差異を具体的に明らかにすると同時に、他の写本のグループ分けを試みてみたい。

## サンプル1 13章 偈 5cd (279.6)

この偈の異読は以下の通りである。

C4	<i>upāsikā[m]ś ca varjeyā prākaṭān anavasthitāṁ   see Pe: JZ1</i>
C5(85β-a)	<i>upāsakāṁś caiva varjeyā prākaṭo yā avasthitāḥ  </i>
C5(90a)	<i>upāsakāṁś ca varjjayet prāṭakāyām avasthitān*    see C6</i>
K	<i>upāsikāś caiva (va)rjye[rjje]yā prākaṭena 'navasthitān*    see T2: JZ2, JZ3</i>
N3	<i>upāsakāṁś ca varjeyā prākaṭā yā avasthitām*    see T8</i>
B	<i>upāsikāś ca varjeyā prākaṭā yā avasthitā</i>
N1	<i>upāsikā[m]ś ca varjeyā prākaṭā yā avasthitāṁ  </i>
T6	<i>upāsikāś ca varjeyā prākaṭā yā avasthitām   </i>
T7	<i>upāśakāṁś ca varjeya prākaṭā yā avasthitāḥ   </i>
N2	<i>upāsakāṁś ca varjjaya prākaṭā yā avastitā    see A1</i>
StP	<i>upāsikāś ca va(r)jeyā prākaṭān anavastitā</i>
A2	<i>upāsikā[m]ś ca varjayet prākaṭā yā avasthitā   see A3, P3: R, T9; T4, T5: C1, C2</i>
P2	<i>upāsa(kā)n varjayec ca prākaṭā yā avastitāḥ see P1 sākaṭā</i>
T3	<i>upāsakāṁś ca varjjaye p(r)ākate(?) yah avasthitānh   </i>

① この偈は、cとdの二つの部分に分けて考えることができる。前半の特徴は *upāsikā-[m]ś/upāsakāṁś* である。Fは前者の、Oとチベット語訳は後者の読みである<sup>12</sup>。D2<sup>13</sup>は *upāsakāṁś* と読む。

❷ 後半は、anavasthitāṁ / yā avasthitāḥ (°tāṁ) の違いである。これら両者では意味が違つてくる。K の読みはそのことを明解に解釈している。N1, N3, T6 は °tāḥ であろう。ここは、B 系写本の読みが一致しない箇所である。StP の読みは独特である。T3 は迷ったあげくの誤写と理解する。

❸ C5 (90a), C6 は双子のフォリオである。prāṭakāyām は誤写であろう。

### サンプル 2 偲 7cd (279.9)

この偈の異読は以下の通りである。

C4	tasyā bhāṣet* sadā vīro anolino anisritāḥ    see Pe
C5 (85β-b)	tasya bhāṣe sadā vīro anolī(no) anisritāḥ
C5 (90a)	tasya bhāṣet* svayam̄ dhīro 'nolino 'nisritāḥ    see C6 ayam̄ dhīro
K	tasya bhāṣet sadā vīro anolino aniśritāḥ
N3	tasya bhāṣe svayam̄ dhīro anolino aniśritāḥ    see T8
B	tasya bhāṣet* svayam̄ dhīro anolino aniśritāḥ   see A1 bhāṣa
N1	tasyā bhāṣet sadā vīro ano[na]lino aniśritam̄
T2	tasya bhāṣet sadā dhīro anolino aniśritāḥ    see C1, C2: A3
T6	tasya bhāṣet svayam̄ vīro anolino aniśritāḥ
T7	missing
N2	tasya bhāṣe svayam̄ dhīro anolino anisritāḥ
StP	tasya bhāṣe svayan̄ dhīro anolino anisritāḥ
A2	tasya bhāṣe svayam̄ dhīro anolino   anisritāḥ see R, T9; T4, T5: T3
P2	tasya bhāṣet svayam̄ dhīra anolino aniśritāḥ    see P1 bhāṣe
P3	tasya bhāṣe sadā dhīro anolino anāśritāḥ

❶ ここは、sadā vīro D2: C4: C5 (85β-b): K: Pe, N1: C6、sadā dhīro T2: C1, C2: A3, P3: JZ2, JZ3、svayam̄ dhīro C5(90a), C6: N3, T8: B, N2, A1, StP: A2; R, T9; T4, T5: T3: JZ1 に分かれる。F, O は sadā vīra、SIP は sadā vīrah と読み、チベット語訳も dpa' bo rtag tu なので、sadā vīro のグループに入るかと思う<sup>14</sup>。なお、vīra-/dhīra- の混同については、偈 17ab および辛嶋 (2003, p. 151) を参照。

❷ C6 の ayam̄ は誤写と考えられる。

### サンプル 3 偲 18cd (281.8)

この偈の異読は以下の通りである。

C4	gocaro yādrśās teṣāṁ tam śrnotha prakāsaīāḥ
C5 (85β-b)	gocaro yādrśas teṣāṁ tatkṣaneṣu prakārasah

C5 (90b)	gocaro yādrśas teśān tac chṛnotha <i>prakārathah</i>    see C6, JZ1 <i>prakāratah</i>
K	gocaro yādrśas teśām tan śṛ(no)tha <i>prakāsatah</i>    see P1, P2
N3	gocaro yādrśas teśām tac chṛnotha <i>prakāśatah</i>    see T8: JZ2
B	gocaro yādrśas teśām tac chṛnotha <i>prakāsa(ta)h</i>
T2	gocaro yādrśas teśām tac chṛnotha <i>prakāśatah</i>    see T6, N2, A1
T7	<i>missing</i>
Pe	gocaro yādrśas teśām tam śṛnotha <i>prakāraśah</i> see D3: N1: StP: JZ3
A2	gocaro yādrśas teśām tam śṛnotha <i>prakāsatah</i>   see A3, P3: C1, C2: R, T9; T4, T5

❶ ここは、C5 (90b) と C6 が *prakārathah* と独自の読みである。これ以外に *prakāśatah* (s/s), *prakāraśah* (s/s), *prakāratah* の異読がある<sup>15</sup>。

❷ D2 を渡辺は *prakāśatah* と読み<sup>16</sup>、辛嶋は Pe 等の読みに準じて *prakāraśah* と読む<sup>17</sup>。筆者はどちらとも断定できない。

❸ C5 (85β-b) の *tatkṣaṇeṣu* は、これで意味はとおるが、筆者は誤写と考える。

#### サンプル 4 假 19cd (281.10)

この假の異読は以下の通りである。

C4	sūnya <i>nirīhāḥ</i> sthita <i>nityakāle</i>   ayu gocaro <i>ucyati</i> pañditānām
C5 (85β-b)	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>nityakāle</i> ayam gocaro <i>uccati</i> pañditānām
C5 (90b)	sūnyā <i>nirīhā</i> sthitaḥ <i>sarvakāle</i>   ayam gocaro <i>ucyati</i> pañditānām*   see C6 <i>sarvakālam</i>
K	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>nityakālam</i>   ayam gocaro <i>ucyati</i> pañditānām
N3	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>sarvakāle</i> ayu gocaro <i>vucyati</i> pañditānām    see T8
B	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>sarvakāle</i>   aya gocaro <i>vuccati</i> pañditānām
T2	sūnyā <i>vihārī</i> sthita <i>nityakālam</i> ayu gocaro <i>vucyati</i> pañditānām
T6	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>sarvakālam*</i>   aya gocaro <i>vuccati</i> pañditānām
T7	<i>missing</i>
Pe	sūnya <i>nirīhakāḥ</i> sthita <i>nityakāle</i>   ayu gocaro <i>dravyati</i> pañditānām see N1 <i>ucyati</i>
N2	sūnyā <i>vihārī</i> sthita <i>sarvakāle</i>    ayam gocaru <i>budhyati</i> pañditānām*   see A1 <i>vucyati</i>
StP	sūnyā <i>nirīhā</i> sthita <i>sarvakālah</i> aya gocaro <i>ucyati</i> pañditānām
A2	sūnyā <i>vihārī</i> sthiti <i>nityakāle</i>   ayam gocaro <i>uccati</i> p[r]añditānām   see A3, P3: R, T9; T4, T5: C1, C2 <i>nirīha</i>
P1	sūnyāni <i>vihārīha</i> sthiti <i>nityakāle</i> ayam gocara <i>uccati</i> pañditānām    see P2

❶ 19c の *nirīha-/vihārin-* と *nitya°/sarva°* の違いの組み合わせが、グループ分けの目安となる。これらに、ギルギット写本、O, SIP, F, JZ1, JZ2, JZ3 を配置すると<sup>18</sup>、次のような結果になる。

<i>nirīha-, nitya°</i>	C4, C5(85β-b), K, Pe, N1, D2, D3, JZ3, O, SIP, F
<i>nirīha-, sarva°</i>	C5(90b), C6, N3, T8, B, JZ1
<i>vihārin-, nitya°</i>	T2, JZ2, A2, A3, P3, R, T9, T4, T5, C1, C2, P1, P2
<i>vihārin-, sarva°</i>	T6, N2, A1

❷ Pe *dravyati*, N2 *budhyati*, P1, P2 *śūnyāni vihāriha* は誤写と理解する。Pe, N1 *nirīhakāḥ* については BHSD p. 299 を参照。ただし、これは韻律に合わない。

ここで、C5 (85β) は、C5 (85α-a), C5 (90b) とは異なるテキストの読みのフォリオであることが明確になった。

#### IV. C5 の所属グループについて

C5 は、2 章で C4 の読みによく合い、3 章から 6 章までは C4, N1, Pe, A1 に合う読みである。7 章から梵本写本の前半の終わり (11 章の中頃) までは、K の読みによく合うようになるが、上記の 4 本の写本にも合う読みを維持する。後半からは、双子の姉妹のごとく C6 の読みとほぼ一致する。ここで、後半のどこから C5 と C6 が一致するようになるのかが重要である。戸田は「C5 は C6 (fol. 83ff.) に類似している」と書いている<sup>19</sup>。C6 のフォリオ 83 (KN 299.9–302.13) は、14 章 (KN 297.1–314.6) に収まる範囲であるが、戸田の『研究報告書』II, III<sup>20</sup>を読めば、すでに 12 章 (KN 267.1ff.) で C5 と C6 の読みはよく一致し (箇所によっては、つかず離れずの曖昧な部分もみられるが)、他の写本には見られない独自の読みをすでに維持している。したがって、筆者は、C6 fol. 83ff. は、C5 fol. 83ff. (KN 258.12ff.) のことではないかと考える。つまり、上記の戸田の記述は「C6 は C5 (fol. 83ff.) に類似している」と考えたほうが納得がいく。

なお、C6 は、前半は B 系 (B, T6, T7, N2, A1) に合う読みである。ついでながら、A1 は 2 章から 6 章までは C4, Pe, N1 のグループに属し 7 章から 27 章まで一貫して B 系に属するようになる。

C5, C6 は、テキストの後半から、双子の写本として独自の読みを保ちながら、章によつて一律ではないが、B 系, T2, P1, P2: C4, Pe, N1 に類似した読みの傾向を示していく。これらのより具体的記述のためには、B 系写本のさらなる分析が必要となるので、本稿で記述することは今の段階では困難である。

## v. テキスト後半の C5, C6 の読みについて

### サンプル 1 XV-KN (320.9-10), (321.2-3)

① 最初の範囲、KN (320.9-10) の C5, C6 の読みは以下のとおりである。

te tena gareṇā vā viṣeṇā vā duḥkhābhī(r) vedanābhīr abhīraurṇā bhaveyuh | te tena  
gareṇā vā viṣeṇā vā dāhyamānāḥ pṛthivyāṁ prapateyuh ||  
see C6 atiraurnā (sic)

斜体の語の異読によって写本を分類すれば以下のようになる。

C4, D1	abhibhūtā	dahyantah	praveṣṭeran*	D1 °yantā
K, Pe, JZ1, 2, 3	abhibhūtā	dahyantah	praveṣṭeyuh	
T2	abhibhūto	dahyantah	prapateyuh	
T6	abhibhūtā	dahyamānāḥ	praviṣṭeyuh	
A1	abhibhūtā	dahyamānā	prapateyuh	
N1	abhibhūtā	dahyeyuh	pravimbiram (sic)	
C5, C6	abhīraurṇā	dahyamānāḥ	prapateyuh	C6 ati°
T7, N2	abhi(tunnā)	dahyamānā	prapateyuh	N2 abhitunnā
T8	abhistunā	dahyantah	praveṣṭeyuh	N3 (omission)
R, T9; T4,	abhījñātā	dahyantah	prapateyuh	
T5: P1, P2				
C1, C2: P3: T3	abhījñātā	dahyantah	praveṣṭeran*	P3, T3 °ram*
A3	duḥkhārttā	(omission 320.10-11)		
A2	(missing 308.8-404.5)			
StP	duḥkhanīṇu(?)tā (sic)	dahyantah	prapateyuh	

② 次に、KN (321.2-3) の C5, C6 の読みは以下のとおりである。

atha khalu sa vaidyas tān\* putrān\* duḥkhitān\* drṣṭvā vedanābhībhūtān\* pṛthivī  
pariveṣṭamā(nā)n\* see C6 tān, °bhūtān

斜体の語の異読によって写本を分類すれば以下のようになる。

vedanābhībhūtām dahyataḥ pṛthivyāṁ pariveṣṭamānām R, T9; T4, T5: P1, P2: C1, C2: A3,  
P3: T3: D1 dahyantah (sic)  
vedanābhībhūtām pṛthivyāṁ pariveṣṭamānām C4, K, Pe, N1: JZ1, JZ2, JZ3: T2: T6, T7, A1:  
T8; N2 vedanānubhinnām (sic), StP vedanābhītūrṇām see ① T7, N2

① ①と②を比較すると、*abhibhūta-* をはじめとする①の異読は、②では N2 と StP 以外はすべて *abhibhūta-* になっていることがわかる。ここで、注目すべき語は C5 と C6 の *abhiraurnṇa-* と T7 と N2 の *abhitunna-* である。*abhiraurnṇa-* は KN p. 320, fn. 10) に記されている。これは、*abhi-rud-* の hyper-Sanskritism と考えられるが<sup>21</sup>、その意味は *abhibhūta-*, *abhitunna-* と異なる。ここに、この双子の写本の独自性がうかがえる。なお、カシュガル写本は *abhitūrṇa-* と讀んでいる<sup>22</sup>。

② ここは *dahyat-* と *dahyamāna-* に分かれるが、②では D1 を除けば、すべて紙写本である。

③ *pr̥thivyām* は②で双子の写本のみが *pr̥thivī (sic)* と讀む。

④ ①の *praveṣṭ-* と *prapat-* は意味が異なるが、②では *pariveṣṭ-* に統一される。また、*praveṣṭ-* と *pariveṣṭ-* の違いも重要である。ちなみに、中央アジア系の写本は *parivart(t)a-* と讀む<sup>23</sup>。KN の *pariceṣṭa-* (321.3) は *ve/ce* の混同であろう。荻原・土田本、ダット本でもそのままになっている<sup>24</sup>。

⑤ P3 の読み *práveṣṭ-*, *pariveṣṭ-* のどちらもビュルヌフは “ils se roulent par terre.” “... se roulant par terre,” と訳している<sup>25</sup>。これは漢訳かチベット語訳を参考にした可能性がある<sup>26</sup>。

## サンプル 2 XX-10ab KN (393.9), 10cd KN (393.10)

XX-10ab KN (393.9) を C5, C6 は次のように讀んでいる。

rahasya jñāne puruṣottamānām | ye bodhimāṇḍasmi vicitratāśī\* || C6 °māṇḍesmi

斜体の語の異読によって諸写本を分類すれば以下のようになる。

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| ① <i>vicintitāśī*</i> | K: N3, T8, P3: B, T6, T7, N2, A1: Pe, N1: P1, P2, T2 ( <i>missing</i> ) |
| ② <i>vicintitāśī</i>  | C1, C2 vi( <i>omission</i> 393.9–10)                                    |
| ③ <i>vicintatāśī*</i> | C4: StP   |
| ④ <i>vicintatāśī</i>  | R, T9; T4 ( <i>omission</i> ), T5; T3; A3, A2 ( <i>missing</i> )        |

① ①と②は、*vicintita-*, ③と④は *vicintata-* の違いであるが、後者は前者の誤写と理解する。C5, C6 の *vicitrata-* は、*vicintita-/vicintata-* とは意味が違ってくる。しかし、*vici(m)t[r]ata-* の可能性も捨てきれない。いずれにしろ、C5, C6 の双子写本独自の読みといえる。

続く、XX-10cd KN (393.10) を C5, C6 は次のように讀んでいる。

anucintaye so 'pi ta kṣipram eva | yo dhāraye sūtra muhūrtta dharmam |  
C6 a(nucinta)ye

斜体の語の異読によって諸写本を分類すれば以下のようになる。

- |                           |  |
|---------------------------|--|
| ① <i>ima bhūtadharmaṁ</i> | K: N3, T8                              |
| ② <i>'ma bhūtadharmaṁ</i> | R, T9; T4, T5: T3; A2, P3: C1, C2: StP |

- ③ *imu bhūtadharmaṁ* C4: B, T6, T7, N2, A1: Pe, N1  
 ④ *tu bhūtadharmaṁ* P1, P2 *bhutadharmaṁ*, T2 (*missing*)

❶ *sūtra* と *muhūrtta* は本来なら *sūtram*, *muhūrttam* であるが、韻律の関係でこのようになっている。また、*sūtra . . . dharmam* を *dharmaśūtra-* の split-compound と解釈すれば、これら双子の写本の読みは、他の写本の読みである *ima bhūtadharmaṁ* とは解釈が異なるものになる。しかし、筆者は *muhūrtta dharmam* を '*mu bhūtadharmaṁ*' と関連した誤写の可能性も残るとは考えている。

❷ ④も独自の読みといえる。P1, P2 の双子写本の原本の T2 が失われているのは残念である。

### サンプル 3 XXI-3ab KN (402.8), 4ab KN (402.10)

C5, C6 は次のように読んでいる。

<b>XXI-3ab</b>	<i>yā gati tilapīḍānāṁ tilakudyānāṁ yā gatis</i> C6 (t)ilapi°, °kuḍyāna
<b>XXI-4ab</b>	<i>yā gatis tilakūṭānāṁ kānsakūṭānāṁ ca yā gatih  </i> C6 (t)ilakūṭānā(m) kā/// // (g)atih

それぞれの箇所の斜体の語の異読によって、諸写本を分類すれば以下のようになる。

#### 3ab

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| ① <i>tilakūṭāna</i>     | K: StP; D1, D2: JZ1     |
| ② <i>tilakūṭānāñ ca</i> | Pe: T2, P1, P2: A1: JZ2 |
| ③ <i>tilakūṭām ca</i>   | P3                      |
| ④ <i>tilakūṭānāṁ ca</i> | R, T9; T4, T5: T3       |
| ⑤ <i>tilakūṭāna</i>     | C4                      |
| ⑥ <i>tilakūṭāna</i>     | B, N2                   |
| ⑦ <i>tilakūṭānāñ ca</i> | N1; T6: C1, C2          |
| ⑧ <i>tilakūṭānāñ ca</i> | JZ3                     |

❶ ①から④までは、活用語尾や接続詞の違いはあっても、°kūṭa- として理解できる<sup>27</sup>。⑤から⑧までは、同様に、語根 *kutṭ-* から派生した名詞 *kutta-*, *kutṭana-* と解釈して無理はないだろう。⑧については、ぜひとも原本を見たいと思う。

❷ C5, C6 の *kudya-* は、*kutta-*, *kutṭeti* と関連があると考えられる<sup>28</sup>。

#### 4ab

- |                                   |       |
|-----------------------------------|-------|
| ① <i>kulakūṭānāṁ mānakūṭāna</i>   | K: N2 |
| ② <i>kulakūṭānāṁ kambhakūṭāna</i> | JZ2   |

③ tulakūṭānāṁ mānakūṭāna	B, T6, A1, StP
④ tulakūṭānāṁ kansakūṭāna	T2, P1, P2: D1, D2 <sup>29</sup>
⑤ tūlakūṭānāṁ mānakūṭānāṁ	R, T9; T4, T5: C1, C2: JZ1 mānakūṭāna
⑥ tulakūṭānāṁ kansakūṭṭana	C4
⑦ tulakūṭānāṁ kansakūṭāna	N1: JZ3 kansakūṭānāṁ
⑧ tūlakūṭānāṁ mānakūṭāna	Pe: T8 tulakrūṭānāṁ ( <i>sic</i> )
⑨ tulakūṭānāṁ mānakūṭānāṁ ca	A3, P3
⑩ tukūṭānāṁ māṣakūṭāna ca	T3 ( <i>sic</i> )

❶ C5, C6 のみが *tila-* と読んでいるのに対して、他の写本は *kula-, tula-* となっている。どれもそれなりに意味はとおるが、⑦から⑩の *tulakūṭṭa-* では、筆者にはその意味が理解できない。

❷ 次の語句は *māna-, kansa-* (Skt. *kāṃsya*, BHS *kāṃsa*) と *kūṭa-, kūṭṭa-* の組み合わせであるが、ここも *kuṭṭana*, *kūṭṭāna*, *kūṭṭānāṁ* では解釈に無理が生じる。知られている読みは、*tulakūṭa-* と共に、*kāṃsakūṭa-* である<sup>30</sup>。

❸ ❶と❷の視点を満たすのは④の読みである。

❹ C5, C6 の *tila-* は *tula-* の誤写と考えられる。

❺ ❷の *kambha-* はよくわからない。

#### サンプル 4 XVIII-KN (372.3-5)

この散文の箇所は戸田によって 1984 年に採り上げられている<sup>31</sup>。しかし、筆者は筆者なりの意図をもって、ふたたび採り上げることにした。

戸田の論旨は、KN, R, K, C4, C5, C6, B, T2, T6, T7, N1, N2, N3, D1, D2, T8, A1, Tib., O,『正法華經』,『妙法蓮華經』のテキストを比較検討し、列挙した梵文諸写本のグループを次の四種類に分け、KN の “*dharmanayena samsyandayisayati*” という部分に焦点を当て、ギルギット写本より古い読みがいかなるものであるかを想定するこであった。彼のグループ分けの結果は以下のごとくである。

- [1] *samsyandayati*, (a) D1, D2 (-*upanayena*), (b) Tib. (-*nayena*)
- [2] *saṃdarśayati*, (a) K, N1 (-*upanayena*), cf. O. (b) C4, T2, N3, T8 (-*nayena*)
- [3] *dharman deśayati*, C5, C6 (-*upadeśanena*)
- [4] *samsyandayati*, B, T6, T7, R, A1 (-*nayena*)

戸田の結論は、「[1]のギルギット本の形より以前に、“*dharmanayena samsyandayisayati*” という文形が存在していたと想定したい」<sup>32</sup>というものであった。また、彼はこの論考で「[3]は、[2] (a) の異形と考えられ、C5 及び C6 の写本は独特の読みを有していることが知られよう」と記している。筆者はこの記述に注目し、新たな資料を加え、この双子の写本の読みの独自性を浮き彫りにしたい。

C5, C6 は次のように読んでいる。

*sa ca dharmam bhāṣate | so 'syā smṛtau na pramoṣam yāsyati | ye keci | llokikā  
lokavyavahārāṇī bhāṣyāṇī cā mantrāṁ vā sarvāṁs tān\* dharmōpadeśenena dharman  
deśayiṣyanti |  
C6 mantrāṁ\*, °deśatena dharmam*

上記の文の斜体の語を三区分し、それぞれの異読によって、諸写本を分類すれば以下のようになる。

### 第一区分

① yañ ca dharmam bhāṣiyate	D1, D2: C4, K: JZ1
② yañ ca saddharmam bhāṣiyate	B, A1: T2, P2: JZ2: P1 deśayiṣyati
③ yañ ca sa dharmam bhāṣiyate	T6, T7, N2
④ yam ca dharmam bhāṣiyati	N3, T8: R, T9; T4, T5: T3; A3, P3; C1, C2: Pe pañca (sic)
⑤ yam ca dharman deśayiṣyate	N1

❶ ①②と③は同じものと考えられる。P3 の読みは *bhāṣiya*(?) で不明だが、④に区分できると考える。

### 第二区分

① lokavyavahārā mantrāṇī	D1, D2 ( <i>omission</i> ): C4, K, Pe, N1: JZ1 C4 mantrā(ṇī), Pe etāni: R, T9; T4, T5: T3; A3, P3; C1, C2
② lokavyavahārā mantrā	N3, T8: B, T6, T7, N2, A1 °hāritāṣyāṇī (sic)
③ lokavyavahārāṇāṁ mantrāṇī	T2, P1, P2: JZ2

### 第三区分

① dharmōpanayena samṣyandayiṣyati	D1, D2
② dharmōpanayena sandarṣayiṣyati	K, N1: P3 (?): JZ1
③ dharmanayena samdarṣayiṣyati	C4: N3, T8: T2, P1, P2: JZ2
④ dharmanayena samṣyandayiṣyati	B, T6, T7, N2, A1: Pe: R, T9; T4, T5: T3; A3; C1, C2 dharmāṇupayane (sic)

❷ P3の読みは *dharmaṇupayane samṣyandaśayiṣyati* である。これは、① *dharmaṇupayene samṣyanda[ś]ayiṣyati* とも、② *dharmaṇupayene sa[ṁ]syānda(r)śayiṣyati* とも読むことができる。筆者は小槻 (2008, p. 204, 197b3) で②の読みを選択した。しかし、そのための積極的な根拠があったわけではない。ビュルヌフは①を選択して、“seront par lui conciliées avec les règles de la loi.” と訳している。たぶん、チベット語訳を参考にしたのであろう<sup>33</sup>。

❷ 戸田のグループ分けと筆者のそれとを比較すると以下のように一致する。資料が増えても、「C5 及び C6 の写本は独特の読みを有していることが知られよう」という彼の予測は正確であった。

- [1] (a) と①は同じ。
- [2] (a) には JZ1 が加わる。
- [2] (b) には P1, P2 の双子の写本と JZ2 が加わる。
- [3] は C5 と C6 のみである。
- [4] には B 系 (B, T6, T7, N2, A1) の他に Pe, R 系 (R, T9; T4, T5), T3; A3; C1, C2 が加わる。

❸ A2 (*missing*), JZ3 (*missing*) と中央アジア系写本は考察から除外した。

## 注

1. 略号については、梵文法華經写本略号一覧を参照。
2. Bendall (1883, pp. xxv, 173), Baruch (1938, p. 2), Yuyama (1970, p. 13), Vogel (1974, pp. [4]–[5]), Petech (1984, p. 45).
3. Bendall (1883, Historical Introduction p. vi), 佐伯 (2003, p. 186).
4. Bendall (1883, pp. xxv, 173).
5. Bendall (1883, pp. 172–173), Baruch (1938, pp. 1–2), Yuyama (1970, pp. 12–20), Vogel (1974, pp. [4]–[5]), Petech (1984, pp. 38–49). これらの内で、書写年の判定に1–2年の誤差がみられるものがあるが、論旨に影響を与えないで無視する。Pe, N1 については、それぞれ戸田 (1984a, p. 260), (2001, pp. xix–xx) を参照。
6. 戸田 (1984, p. 151).
7. Jiang Zhongxin III 1, III 2, III 3, 2006. 以下 JZ1, JZ2, JZ3 と略す。
8. 渡辺 (1975, p. 244, fn. 46).
9. 真上の欄外に <sup>o</sup>ddhum と訂正がある。
10. Burnouf (1852, p. 161).
11. 戸田 (2000a, pp. [28]–[45]).
12. 辛嶋 (2003, pp. 107, 147).
13. 渡辺 (1975, p. 253, fn. 5). 渡辺のfn. 7 は妥当だと思われる。
14. 辛嶋 (2003, pp. 111–115).
15. その他の異読については辛嶋 (2003, pp. 116–117). および、それらの Notes 15, 18, 20, 23 を参照。ただし、C5, C6 には言及されていない。JZ1 も参照。

16. 渡辺 (1975, p. 253, fn. 40).
17. 辛嶋 (2003, p. 158, note 15).
18. 渡辺 (1975, p. 254), 辛嶋 (2003, pp. 118–119), JZ1 (p. 157), JZ2 (p. 159), JZ3 (p. 152) を参照。
19. 戸田 (2000, p. 63).
20. 戸田 (1995, pp. [22]–[48], 1996, pp. [1]–[9]).
21. BHSG, p. 227.
22. 戸田 (1981, p. 157), BHSD, p. 51,
23. 戸田 (1981, pp. 157, 268).
24. 萩原・土田 (1958, p. 273), Dutt (1953, p. 209).
25. Burnouf (1852, p. 195).
26. 辛嶋 (1992, pp. 186–187).
27. Cone (2001, p. 724) cf. kūṭa<sup>2</sup>. また、BHSD, p. 189 の kūṭanā- と 辛嶋 (1992, p. 240) も参照。
28. Cone (2001, pp. 704, 705) cf. kutṭa, kutṭeti, ~ayati, kudda. また、BHSD, p. 185 の kuṭtana-, kutṭ(ayati) も参照。
29. 渡辺 (1975, p. 285, fn. 19) 参照。
30. BHSD, pp. 175, 255. 萩原 (1986, p. 332) 参照。
31. 戸田 (1984, pp. 174–178).
32. Ibid. (p. 177).
33. Burnouf (1852, p. 225).